

# Arthuriana Japonica: Newsletter No. 27

December 2014

## 国際アーサー王学会日本支部会報

Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

### 目次

I. 2013 年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	1
大会発表要旨	3
特別講演要旨	4
シンポジウム発表要旨 (一部)	4
II. 松原先生を追悼して	4
III. 会計からお願い	5
IV. 会員名簿に関するお願い	5
V. 研究発表・シンポジウム企画募集	5
VI. 新役員について	6
VI. 文献情報	6
英文学	6
独文学	7
仏文学	8

### I. 2013 年度年次大会報告

日本支部の 2013 年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

[日時] 2013 年 12 月 14 日 (土) 午後 12 時 30 分より

[場所] 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 1F シンポジウム・スペース

[大会費] 1,000 円 (学生無料)

[懇親会費] 5,000 円 (学生 3,000 円)

### 年次大会プログラム

\*開会(12:30)

\*開会の辞 支部長 細川哲士 (立教大学名誉教授)

\*第 1 部 研究発表 (12:30-13:30)

司会: 横山由広 (慶應義塾大学)

「フェロー語バラッド Ívint Herintsson の伝承」  
林邦彦 (尚美学園大学非常勤講師)

「ゴットフリートの『トリスタン』における愛と身体」渡邊徳明 (日本大学)

\*第 2 部 特別講演 (13:45-15:00)

司会: 細川哲士

「Peter Field の新版 (2013) に至るマロリーの諸版について」高宮利行 (慶應義塾大学名誉教授)

\*第 3 部 シンポジウム (15:15-17:15)

司会: 高木眞佐子 (杏林大学)

「ケルトの唄人トールキン」うたびと 辺見葉子 (慶應義塾大学)

「トールキンの『アーサー王の死』と頭韻詩の伝統」伊藤盡 (信州大学)

「現代詩人トールキン」高橋勇 (慶應義塾大学)

\*支部総会(17:30-18:00)

\*懇親会(18:30 より)

(場所: 来往舎 1F ファカルティ・ラウンジ)

2013 年度大会も、会員・非会員の皆さまに多数ご参加・ご協力により、無事に開催することができました。物心両面に渡るあたたかい応援を下さったみなさまには、心より御礼申し上げます。今大会は慶應義塾大学教養研究センターにご後援いただくと共に、慶應義塾大学の不破有理先生にご尽力いただきました。篤く御礼を申し上げます。また受付業務も、慶應義塾大学の学生さんにご協力いただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。懇親会も、盛会のうちに終了することができました。ご参加・ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。(事務局)

### 総会議事録

\*報告事項

(1) 2013 年度の活動について

(2) 新年度よりの本部発行誌の体制について

従来 of Bibliographical Bulletin が、投稿論文の掲載を含む *Journal of the International*

Arthurian Society と書誌情報を掲載する *Bibliography of the International Arthurian Society* の 2 本立てとなることについて報告があった。加えて会員資格について、日本支部では従来通り会費未払い 3 年までを許容する方針であること、報告があった。

### (3) ブカレスト大会の案内

2014 年 7 月 20-27 日にルーマニアのブカレストで第 24 回国際大会が開催される旨、報告があった。

### (4) 書誌担当からのお願いと報告

Bulletin とニューズレターに掲載される書誌の編集方針の違いについてあらためて説明があった。前者はアーサー王伝説もしくは中世文学に関連する会員業績に限り、後者は会員のその他業績および広くアーサー王伝説関連の出版物を掲載する。

また Bulletin に掲載される梗概の長さは上限が 50 語である旨、寄稿者に注意を呼びかけた。また掲載にあたっては、できるかぎり執筆者本人から書誌担当者に献本や抜き刷り送付をお願いしたい旨が強調された。

## \* 審議事項

### (1) 2013 年度決算報告

会計担当幹事の渡邊徳明氏より 2013 年度の会計収支決算報告が報告され会員の承認を受けた。

## \* 収入

項目	収入金額
大会費	27,000
展示料	10,000
懇親会会費	125,000
会費	180,000
入会金	0
寄付金	
利子	194
修正金支払い	64,138
小計	406,332
2012 年度からの繰越金	632148
計	1,038,480

## \* 支出

項目	支出金額
懇親会費用	106000
大会アルバイト料	10000
本部への学会誌代支払い	157320
送金手数料	2500
事務・雑費・郵便費	33263
ホームページ関連費用	6280
前年度の前借分	190
会費振り込み手数料	2440
払い込み用紙印字代	192
小計	318185
2013 年度への繰越金	720295
計	1038480

\*本部への学会誌代支払いは、2012 年度分の金額は 13 年度支出として払われた。学会本部の作業の送れにより、13 年度の支払いはまだ行われておらず、14 年度支出からなされる予定である。

\*2013 年度決算において 914295 円が学会の普通口座の残高であるが、このうち 194000 円は前回会計決算以降から今回決算までの間に会費として納められた金額の合計であり、14 年度収入の一部である。従って、実質的な 14 年度への繰り越し金は口座残高からこの 194000 円を差し引いた、720295 円である。

\*12 年度からの繰越金 632148 円の他に、既に振替口座を通して入金された 3 年度収入の 129000 円から、13 年度収入からの前借 190 円を差し引いた額が普通預金口座に入っている。これらを加算すると  $632148+129000-190=760958$  円となり、昨年度決算時の普通口座残金と一致する。

### (2) 2014 年度予算案提出

続いて 2014 年度予算が報告され会員の承認を受けた。

## \* 収入

項目	収入金額
懇親会費	125000
大会費	35,000
会費	250,000
寄付金	10000
入会金	18000

展示料	10000
小計	448000
2013 年度からの繰越金	720295
計	1168295

\* 支出

項目	支出金額
懇親会費	125000
大会経費・アルバイト料	10000
本部への学会誌代支払い	300000
海外送金手数料	2500
事務・雑費・郵便費	40000
ホームページ関連費用	8000
小計	485500
2014 年度への繰越金	682795
計	1168295

(3) 新入会者承認について

以下の 6 名より入会の希望があり、これを承認した。

岡本広毅氏 (立教大学)

玉川明日美氏 (立教大学)

浜野明大氏 (日本大学)

田中一嘉氏 (成蹊大学)

沼田篤良氏 (関西学院大学)

滝口秀人氏 (自由ヶ丘学園高等学校)

大会研究発表要旨

①「フェロー語バラッド Ívint Herintsson の伝承」

林邦彦

今日、フェロー諸島、およびデンマークの一部の地域において使用されているフェロー語では多くのバラッドが伝承されている。これらのバラッドは主として 18 世紀後半以降に採録されたものであるが、その中に *Ívint Herintsson* と呼ばれる、アーサー王伝説に題材を取ったと考えられる作品が今日まで伝わっている。この *Ívint Herintsson* と呼ばれる作品は三つのヴァージョンが採録されており、それぞれ A ヴァージョン (*Sandoyarbók* 等に採録。1822-1854 年)、B ヴァージョン (*Jens Christian Svabo* による採録。1781-82 年)、C ヴァージョン (*Fugloyarbók* 等

採録。-1854 年)と呼ぶのが通例である。いずれのヴァージョンも複数のバラッドから構成されるバラッド・サイクルで、作品の大筋は三ヴァージョン間で共通している。バラッドサイクル全体としてのこの作品の物語は、表題になっている騎士 *Ívint Herintsson* の父 *Herint* の求婚話、その息子 *Ívint* およびその兄弟の冒険、さらには *Ívint* の息子 *Galian* の冒険によって構成されている (*Ívint* の父 *Herint* の求婚相手の兄が、アーサー王のことと考えられる *Hartan* 王である)。本作品はバラッド・サイクル全体としては一家系の三世代にわたる物語になっており、主人公が三世代にわたって交代している。その中で、本作の表題にもなっている *Ívint* は、一旦は作品の主人公となり、捕らわれの身となった兄弟を救出するなどの活躍を見せるが、作品後半では一夜をともにした貴婦人相手にトラブルを起こすと、その後は息子の *Galian* が物語の主人公となり、クライマックスでは *Ívint* は *Galian* に一騎打ちを仕掛けるも、最後には *Galian* の要求をのむ形で彼に屈するなど、物語上の位置によって *Ívint* の扱いが変化している。また、既述のように物語の大筋は三ヴァージョン間で共通しているが、細かな相違点は多く存在し、特に A ヴァージョンと C ヴァージョンについては各々を性格付けるほどの相違傾向が見受けられる。

②「ゴットフリートの『トリスタン』における愛と身体」

渡邊徳明

1180 年代初頭に完成したフェルデケの『エネアス物語』では、同時代の他の作品には見られないほどの肉感的な性愛描写がなされている。恋人達は自分達の間でのミンネ(愛)の発生を強く意識し、可視的に、即物的に捉え、ミンネの苦しみを肉体的に表現する。それに対し 1210 年頃にゴットフリートに書かれた『トリスタン』では、最初ミンネは男女の心に内在化・内面化していて、本人たちですら、ある時期までその存在に気づかない。読みようによってミンネが存在するようにも、またしないようにも解釈できる。媚薬により初めて彼らのミンネは可視化されるが、媚薬の効能がどの程度なのかは依然として不明瞭である。媚薬は心身に潜在していたミンネを表面化させたに過ぎず、ミンネが物質的作用によって生まれたのではない。『トリスタン』のミンネは物質的手段でコントロールしたり、押さえつけたりできるものではなく、物質性を超越した存在なのだということを本発表では強調した。1180 年頃から始まった中高ドイツ語の宮廷文学は内面性を深め、同時に個々の登場人物の描写は多義的な解釈の余地を生

みだした。そのことは、『トリスタン』におけるミンネ描写にも当てはまるのであり、この叙事詩に描かれるトリスタンとイゾルデの愛は、『エネアス物語』に描かれるそれと比べて、より肉體性が捨象され、観念的な性質を増している。ただし、比喩的表現を通してエロチシズムを感じる余地は残されており、むしろそのような暗喩的手法によりその官能性は一層増したとも言えるのである。

前者の立場については、中世において香料・薬草などの娯楽が医術書などに記されている事実が想起される。後者の立場では、権力による弾圧や、肉體の破滅といった物質的悪条件にも負けない強く観念的なミンネ像が浮かんでくる。畢竟このようなミンネ像の分裂は物質性と観念性という古くからの二元論の伝統の上にあるのである。

### 特別講演要旨

「Peter Field の新版 (2013) に至るマロリーの諸版について」

高宮利行

マロリーの英語散文のアーサー王ロマンスは、キャクストン版 (1485) に始まって、繰り返された再版には直前の版が印刷用原稿に用いられてきた。本書は愛読されることはあっても、研究の対象にはならなかった。19 世紀末にゾンマーがキャクストン版のライラズ本を基に出版した校訂版が、キャクストンの言語分析研究を可能にした。しかし、1925 年ベディエの下でキャクストン版と仏語散文のトリスタンを比較して博士論文を提出したヴィナーヴァは、ゾンマー版に千箇所以上の転写ミスを見出し、新版の校訂を表明した。1934 年にウィンチェスター写本 (大英図書館蔵) が発見され、これと印刷本を英仏の種本と比較校訂した革命的標題をもつ 3 巻本 (1947 [1]) が出現した。ヴィナーヴァは、マロリーが 8 編の騎士ロマンスを書いた後キャクストンがアーサー王一代記にまとめた、二つの現存テキストは 2 度ずつ原本から離れた系統図を持つと主張して、英米の学者たちと論争になり、マロリー学が誕生した。日本人研究者の功績も顕著であった。ところがヘリング (1982) が写本の数葉に印刷活字やインクの跡を発見すると、キャクストン版に植字工が改竄した箇所があることが明らかになった。こういった新たな発見を意識したフィールドの新版 (2013 [2]) が、マロリー学で新たな意味をもつに至った。

[1] *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. by E. Vinaver, Oxford UP, 1947; 3<sup>rd</sup> ed. revised by P. J.

C. Field, 1990. [2] Sir Thomas Malory, *Le Morte Darthur*, ed. by P. J. C. Field, Brewer, 2013.

### シンポジウム発表要旨 (一部)

「ケルトの唄人トールキン」

辺見葉子

アーサー王の Avalon への船出をはじめ、ブリテン諸島西方の異界の楽園の島への航海は「ケルティック」なテーマだと見なされているが、トールキンの神話の原点となったのも Eärendil の西方の不死の楽園への船出であった。『指輪物語』では指輪の力に因る傷を癒すため、ホビットのフロドとビルボが西方の Tol Erssëa に向けて船出して行く。トールキンはこのエルフの楽園の島 Erssëa を Avallon と呼んでいた時期があり、頭韻詩 *Fall of Arthur* の執筆時期もそれに重なる。*Fall of Arthur* の草稿メモからは、アーサー王伝説の Avalon を自らの神話の Tol Erssëa と同一視していたことが見てとれる。トールキンの神話体系では、不死の楽園 Tol Erssëa/Avalon は死すべき運命の者には到達不能なはずだが、ごく稀に例外がある。*Fall of Arthur* ではアーサーとランスロットがこれに相当し、Tol Erssëa/Avalon に向けて船出している。さらに「ケルト」の航海譚も、彼自身の神話における西方の不死の楽園への航海というテーマの、いわばヴァリエーションとして捉えていたようだ。

### II. 松原先生を追悼して

高宮利行

2014 年 11 月 19 日

慶應義塾大学名誉教授でポワチエ大学名誉博士、レジオン・ド・ヌール勲章を受章した松原秀一先生が、去る 6 月 5 日 84 歳で逝去されて半年が経過しようとしています。中世仏文学者、東西説話の比較研究者、フランス語教育者、翻訳者として多大な功績を遺した先達を追悼しようと、原野昇氏とフランス語学文学の季刊誌『流域』の編集長が相談、後輩の鷺見洋一氏の奮闘で、10 月末に追悼特集号が公刊されました。原野昇氏の協力を得た鷺見氏は全力投球で編集・執筆し、葬儀の際の弔辞「千客萬来の人」から詳しい「千客萬来の人の業績」を寄稿、さらに関係者に働きかけて生前の先生の写真を多く掲載しました。こうして、専門外の読者でも

松原先生の多方面での活躍が手に取るようにわかります。

8名による追悼文も（私を除いて）読み応えがありますが、私は特に細川哲士現会長の次の一文に目を留めました。

松原先生は、かつてぼくが学生で留学中、こんなことを言った。「ぼくは一年半の婚約期間中に、手紙をみかん箱で2杯分書き送った。君にそういう熱意がなく、ルコワ先生のようになりたければ、学問に集中するべきだ。もしそうなら修道院に入ったらどうか。ベネディクト会がいいと思うけれど」と言いつつベネディクト会のガイドブックをくださった。溢れる愛情、無類の善意—これほど松原先生らしい逸話はありません。その時の細川先生の表情を想像するだけでも楽しくなります。

松原先生は大衆文化や風俗習慣にも関心をもっておられました。私がマロリー学の権威ヴィナーヴァ教授にお会いしたとき「ところで、フランス人は手の甲で雨を感じるのですか。私の先輩がそう書いておられるのですが」と尋ねてみると「そりゃ当たり前だ」と即答されました。そのことを追悼文に記したところ、これを読んだフランス留学の経験者が一様に驚いたとは、鷲見氏の報告です。松原先生の観察眼は書物の中でだけ発揮されたものではありません。三田の山食にあった教職員食堂や研究室談話室は、こうした話題が飛び交う common room でした。

先生から頂戴した最後のメールは昨年11月11日付で、最後まで古書のことまで頭が一杯のようでした。「松田君編集の今回の本は、無事頂きました。いよいよ外装から本の中身にはいることとなり喜んで居ます。今回、本に入らなかった発表にも読みたいものがあります。『小公女』も『小公子』も若松賤子訳で読んだ僕には『富山房百科文庫』が懐かしい。この文庫のアラビヤナイト、アンデルセン童話集は長年探していますが、入手出来ません。」もちろん iPad から発信されたもので、80歳過ぎてこれを駆使する先生でした。

### III. 会計からのお願い

下記のとおり 2015 年度分会費の納入をお願い申し上げます。払込票は先般お送りした支部大会のお知らせに同封いたしました。寄付金についてもこちらの払込票をご利用ください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部

口座番号：00250-6-41865

年会費：3,000円

会計：渡邊徳明

日本支部では、一口1,000円からの寄付金を随時募集いたしております。ご寄付を希望される方は、年会費払込票に「寄付〇口」とお書き添えの上、年会費とともにお支払い下さい。また大会会場でのご寄付も受け付けております。皆さまの温かいご支援をお願い申し上げます。

### IV. 会員名簿に関するお願い

ご連絡先等の名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせください。ただし実際に会員に配布される会員名簿に関しては、個人情報保護の観点からそれぞれの事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を掲載中止にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

### V. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら事務局までお寄せください。シンポジウム企画は7月末、研究発表は9月末を締切のめどとし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

### VI. 新役員について

細川支部長の任期満了に伴い、本年度は新たな支部長を選出する選挙が行われました。その結果不破有理氏が選出され、2014年度支部総会において任命されました。加えて不破新支部長より、下記の通りに2015年～2017年の幹事会新役員が指名されました。

会長(日本支部支部長)：不破有理(英文学；慶應義塾大学)  
副会長：篠田勝英(仏文学；白百合女子大学)  
幹事(庶務)・事務局長：徳永聡子(英文学；慶應義塾大学)  
幹事(会計)：田中一嘉(独文学；成蹊大学)  
英文担当書誌：新居明子(英文学；名古屋外国語大学)  
独文担当書誌：渡邊徳明(独文学；日本大学)  
仏文担当書誌：高名康文(仏文学；成城大学)

また、併せて Web 委員会委員も以下のように指名されました。

委員長 細川哲士(仏文学；立教大学名誉教授)  
委員 小宮真樹子(英文学；近畿大学)  
委員 小路邦子(英文学；慶應大学非常勤講師)  
委員 滝口秀人(仏文学；自由ヶ丘学園高等学校)

## VI. 文献情報

英文学(書誌担当:小宮真樹子)

〈中世英文学〉

『北欧のアーサー王物語 イーヴェンのサガ／エレクスのサガ』(林邦彦訳)、麻生出版、2013年.

〈研究(単行本)〉

『イギリス文学入門』(石塚久郎・大久保護・西能史・松本朗著、編集)、三修社、2014年.

※トマス・マロリーに関する章あり

キャサリン・アレン・スミス『中世の戦争と修道院文化の形成』(井本响二・山下陽子訳)、法政大学出版局、2014年.

ジャイルズ・コンスタブル『十二世紀宗教改革:修道制の刷新と西洋中世社会』(高山博監修、高山博・小澤実・函野宣忠・橋川裕之・村上司樹訳)、慶應義塾大学出版会、2014年.

トレヴァー・ロイル『薔薇戦争新史』(陶山昇平訳)、彩流社、2014年.

平松洋『ラファエル前派の世界』、KADOKAWA、2013年.

〈研究(雑誌・紀要論文等)〉

荒川佳夫「中世イングランド最大の内乱 薔薇戦争」、『歴史群像』第22号、2013年、pp. 66-80.

桑原俊明「ケルト文化への招待：神話から現代へ(4)アーサー王伝説(前編)」、『盛岡大学英語英米文学学会報』、第25号、2014年、pp. 11-32.

小宮真樹子「神の祝福か、悪魔の呪いかー魔術師マーリンの予言」、『幻想と怪奇の英文学』(東雅夫・下楠昌哉編)、春風社、2014年、pp. 109-130.

高宮利行「愛書家よ、永遠なれ」、『書物學』第1巻「書物学こと始め」(勉誠出版)、2014年、pp. 4-8.

高宮利行「英国愛書家の系譜1 折丁記号 B の前に P を一フィリップ・ブリス(1787-1857)の場合」、『書物學』第3巻(勉誠出版)、2014年、pp. 96-92(左1-6).

高宮利行「監修者のことば」、スタン・ナイト『西洋書体の歴史ーゲーテンベルクからウィリアム・モリ

スへ』(安形麻理訳)、慶應義塾大学出版会、2014年、p.102.

高宮利行「マロリーのテキストを求めて」、『関東英文学研究』、第6号、2014年、pp. 67-76 (181-190) .

高宮利行「ミレニウム—デジタル時代のグーテンベルク聖書」、『書物學』第2巻「書物古今東西」(勉誠出版)、2014年、pp. 6-10 (左) .

高宮利行「ラスキン時代の英国書物文化」『ラスキン文庫たより』第67号、2014年、pp.1-8.

Toshiyuki TAKAMIYA "The Book of St Albans (1486)," in Ed. Potten and Emily Dourish (ed.), *'Emprynted in thys maner' - Early printed treasures from Cambridge University Library*, Cambridge: CUP, 2014, pp. 94-97.

Toshiyuki TAKAMIYA and Richard Linenthal "Early Printed Continental Books Owned in England: Some Examples in the Takamiya Collection," in Carol M. Meale and Derek Pearsall (ed.), *Makers and Users of Medieval Books: Essays in Honour of A. S. G. Edwards*, Cambridge, Brewer, 2014, pp. 178-190.

竹中肇子『『アーサー王物語と祝祭』—祝祭日の異同の考察』、『英米文学にみる仮想と現実：シェイクスピアからソロー、フォークナーまで』(川成洋・吉岡栄一編)、彩流社、2014年、pp.86-101.  
※アーサーの戴冠式までのエピソードでは、父王ユーサー・ペンドラゴンの死によって始まり、国王選挙とアーサーの戴冠式が何度も延期され、王位継承までの道のりが一筋縄ではいかないところが面白い。本稿では、戴冠式のエピソード中、祝祭日が場面展開を促す構成要素となっていることに注目し、マロリーの『アーサー王の死』とマロリーが拠り所にした『マーリンの物語』を祝祭日の観点から考察した。(執筆者自身による要旨)

竹中肇子「コヴェント・ガーデンの誕生」、『ロンドンを旅する 60 章』(川成洋・石原孝哉編著)、明石書店、2012年、pp.79-81.

※コヴェント・ガーデンの名前は、ジョン王の時代(1199-1256)に、ウェストミンスター寺院の修道院付属の菜園として使用されていたことに由来する。修道院(convent)の野菜畑(garden)なのでコンヴェント・ガーデンと名付けられ、やがて現在のようにコヴェント・ガーデンと呼ばれるようになった。本コラムでは修道院の菜園から現在に至るまでのコヴェント・ガーデンの歴史を紹介する。(執筆者自身による要旨)

竹中肇子「夢が導くストーリー」、『文学の万華鏡：英米文学とその周辺』(山本長一・川成洋・吉岡栄一編)、れんが書房新社、2010年、pp. 155-171.

林邦彦「フェロー語バラッド Ívint Herintsson 試論」、『ケルティック・フォーラム』、第17号、2014年、pp. 49 - 60.

前原澄子「17世紀ロンドンの大衆劇場における騎士道ロマンス：道化によるバーレスクの意味」、*Mukogawa Literary Review* 51(2014), pp. 1-11.

町田有里「中世後期イングランドにおける消費と法：奢侈禁止法を中心に」、『白山史学』、第50号、2014年、pp. 57-82.

#### 〈書評〉

林邦彦「Marianne E. Kalinke (ed.) *The Arthur of the North: The Arthurian Legend in the Norse and Rus' Realms*. Cardiff: University of Wales Press, 2011」、*Studies in Medieval English Language and Literature*、第28号、2013年、pp. 81-89.

#### 〈講演記録〉

Toshiyuki TAKAMIYA "Bibliophiles in Darwin, 1975-78: A Personal Reminiscence", *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society*, 2014.

独文学 (書誌担当：林邦彦)

## I 〈論文（紀要論文等）〉

- 石川栄作 『ニーベルンゲンの歌』と『平家物語』の比較研究(5) リューディガーと忠度と敦盛 徳島大学総合科学部『言語文化研究』第21巻(2013年12月)37056頁.
- 山田泰完 表象の記号 早稲田大学創造理工学部社会文化領域人文社会科学研究会『人文社会科学研究』第53号(2014年3月)1014頁.
- 山田泰完 Im Norden etwas Erotisiertes. 早稲田大学創造理工学部社会文化領域人文社会科学研究会『人文社会科学研究』第53号(2014年3月)15025頁.
- 河崎 靖 ルーン文字の起源をめぐって(その1) 京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会『ドイツ文学研究』第59巻(2014年3月)19-46頁.
- SHIMIZU, AKIRA (清水 朗) DIE ‚NATION‘ VOR DER NEUZEIT. IHRE MYTHOLOGISIERUNG IN HISTORIOGRAPHISCHEN UND LITERARISCHEN WERKEN ÜBER KARL DEN GROSSEN Hitotsubashi University “Hitotsubashi journal of arts and sciences” Vol.53, no.1 (Dec-2012) pp. 9-28.
- 寺田龍男 「リーンハルト・ショイベルの英雄本」における聖者 北海道大学『メディア・コミュニケーション研究』第65号(2013年11月)1012頁.
- 寺田龍男 Zur Faktizität in der japanischen Heldendichtung Gunki-monogatari 北海道大学ドイツ語学・文学研究会『独語独文学研究年報』第38号(2012年3月)19025頁.
- 浜野明大 「メディア」としての中世文学作品における「挿絵」と「テキスト」の相互関係：初期中高ドイツ語版『創世記』写本を例として 日本大学文理学部ドイツ文学科研究室桜門ドイツ文学会『Lynkeus』第47号(2014年3月)117-135頁.
- 渡邊徳明 『エネアス物語』から『トリスタン』へ：ミンネの可触性の問題について 日本大学文理学部ドイツ文学科研究室桜門ドイツ文学会『Lynkeus』第47号(2014年3月)137-153頁.
- 渡邊徳明 沈香・胡椒・麝香：中高ドイツ語叙事詩と香料学(特集 文学と異分野の融合) 日本大学文理学部ドイツ文学科研究室桜門ドイツ文学会『Lynkeus』第47号(2014年3月)1-14頁.

## II. 〈書籍〉

石川栄作 トリスタン伝説とワーグナー(平凡社新書687) 平凡社、2013年6月.

### 仏文学(書誌担当：小沼義雄)

#### I 〈原典の校訂版、及び原典の翻訳〉

- 『1200年から1260年頃までのトルバドゥールの哀悼歌(planh)の翻訳』(高名康文訳)、『成城文藝』(成城大学文芸学部紀要)、228号、2014年、pp.90(1)-63(28).
- 『フランス民話集(3)』(金光仁三郎、渡邊浩司、本田貴久、山辺雅彦訳)、中央大学人文科学研究所、2014年(中央大学人文科学研究所翻訳叢書)
- グラック(ジュリアン)『アルゴールの城にて』(安藤元雄訳)、岩波書店、2014年(岩波文庫)
- 『シルトの岸边』(安藤元雄訳)、岩波書店、2014年(岩波文庫)

#### 〈研究書〉

池上俊一『お菓子でたどるフランス史』、岩波書店、2013年(岩波ジュニア新書)



池上英洋『死と復活—「狂気の母」の図像から読むキリスト教—』、筑摩書房、2014年（筑摩選書）

※第三章「聖杯伝説と生贄の祭儀」でアリマタヤのヨセフ伝説について論じている。

池谷文夫『ウルバヌス2世と十字軍—教会と平和と聖戦と—』、山川出版社、2014年（世界史リブレット）

上田耕造『ブルボン公とフランス国王—中世後期フランスにおける諸侯と王権—』、晃洋書房、2014年

尾形希和子『教会の怪物たち—ロマネスクの図像学—』、講談社、2013年（講談社選書メチエ）

※モデナ大聖堂の彫刻やオトランド大聖堂の床モザイクについて多くの解説を含む。

河原温、池上俊一編『ヨーロッパ中近世の兄弟会』、東京大学出版会、2014年

佐藤賢一『ヴァロワ朝—フランス王朝史2—』、講談社、2014年（講談社現代新書）

佐藤彰一『禁欲のヨーロッパ—修道院の起源—』、中央公論新社、2014年（中公新書）

ヒロ・ヒライ、小澤実編『知のミクロコスモス—中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー—』、中央公論新社、2014年

宮下志朗、井口篤『中世・ルネサンス文学』、放送大学教育振興会、2014年

—『ヨーロッパ文学の読み方—古典篇—』、放送大学教育振興会、2014年

#### 〈研究書の翻訳〉

コンパニオン（アントワヌ）『寝るまえ5分のモンテニュー「エッセイ」入門』（山上浩嗣、宮下志朗訳）、白水社、2014年

タックマン（バーバラ・W）『遠い鏡』（徳永守儀訳）、朝日出版社、2013年

ボヌ（コレット）『幻想のジャンヌ・ダルク—中世の想像力と社会—』（阿河雄二郎、北原ルミ、嶋中博章、滝澤聡子、頼順子訳）、昭和堂、2014年

ラベール（ネリー）、セール（ベネディクト）『100語でわかる西欧中世』（高名康文訳）、白水社、2014年（文庫クセジュ）

#### 〈研究論文〉

『流域』（松原秀一追悼）、75号、2014年

※2014年6月5日にご逝去された故・松原秀一先生の追悼記念特集号。以下の追悼文をはじめ、略年譜、業績解題（鷺見洋一「千客萬来の人の業績」）、関係者による多くの写真を含む。ミシェル・ザンク「フランス人以上の「フランス人」、鷺見洋一「千客萬来の人」、鈴木孝夫「弔辞とも謝辞ともつかぬお別れの御挨拶」、岡谷公二「松原秀一君」、山内了一「翻訳の先達」、荻野安奈「松原先生と冬と春」、高宮利行「松原先生を偲んで」、福本直之「松原先生と出会えてよかった話」、細川哲士「先生の三つの指輪」、原野昇「まぼろしの「あとがき」、鷺見洋一「千客萬来の人の業績」

OTAKA (Yorio), « La tournure périphrastique passée *va / vont + infinitif* », 『大手前大学論集』、13号、2013年、pp.201-214.

OGURISU (Hitoshi), « De nouveau sur le texte du *Roland* d'Oxford : lecture », *Zeitschrift für romanische Philologie*, vol.130, issue.1, 2014, pp.23-45.

MATSUMURA (Takeshi), « Remarques lexicographiques sur une traduction de la *Consolation de Philosophie* de Boèce : version bourguignone de la 1<sup>re</sup> moitié du 13<sup>e</sup> siècle », Yan GREUB et André THIBAUT (éd.), *Dialectologie et étymologie galloromanes : Mélanges en l'honneur de l'éméritat de Jean-Paul Chauveau*, Strasbourg, Editions de linguistique et de philologie, 2014, pp.47-68.

佐佐木茂美 『「アルチュール王の死」』（続稿）—国際アーサー王学会を語る—、『流域』、74号、2014年、pp.5-11.

—「アルチュール王の「長方の卓」—トリスタンの軌跡、「円卓の騎士」、「聖杯の騎士」へ—、篠田知和基編『神話・象徴・図像 III』、楽瑯書院、2013年、pp.81-102.

SASAKI (Shigemi), « “Ovide en la fin de son livre Methamorphoseos” : Christine de Pizan et “ses princes à venir” », Danielle BUSCHINGER, Liliane DULAC, Claire LE NINAN, Christine RENO (dir.), *Christine de Pizan et son époque : Actes du Colloque d’Amiens (Décembre 2011)*, Amiens, Presses du “Centre d’Etudes Médiévales”, Université de Picardie – Jules Verne, 2012, pp.166-177 (Médiévales.53).

瀬戸直彦「原作と現存写本の間で—フォルケ・ド・マルセイユの校訂におけるスキラチオーティの方法—」、『早稲田フランス語フランス文学論集』、21 巻、2014 年、pp. 57-78.

SETO (Naohiko), « Messages ambigus dans le diptyque de l’étourneau (Marcabru, PC 293, 25-26) », *Los que fan viure e tresluisir l’occitan, Actes du xe congrès de l’AIEO (Association Internationale d’Etudes Occitanes), Beziers, 12-19 juin 2011*, Limoges, Lambert-Lucas, 2014, pp.304-312.

高名康文「『パレルモのギョーム』と『狐物語』—ジャンルのパロディーについての—考察—」、『ヨーロッパ文化研究』(成城大学大学院文学研究科)、33 集、2014 年、pp.202-248.

—「フランス中世文学における森」、成城大学文芸学部ヨーロッパ文化学科編『ヨーロッパと自然』、成城大学文芸学部、2014 年、pp.25-48.

田桐正彦「がらくた詩の行方—中世フランスのノンセンス詩 (2) —」、『女子美術大学研究紀要』、44 号、2014 年、pp.58-71.

田辺めぐみ「時祷書の語り—マルグリット・ドルレアンの子宝祈願をめぐる—」、『ステラ』(九州大学フランス語フランス文学研究会)、32 号、2013 年、pp.137-152.

—「祈りの文脈—『カトリーヌ・ド・ローアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』—」、『ステラ』(九州大学フランス語フランス文学研究会)、31 号、2012 年、pp.147-161.

細川哲士「声か音か」、『現代文学』、88 号、2014 年、pp.21-26.

渡邊浩司「アーサー王によるローザンヌ湖の怪猫退治とその神話的背景 (『アーサー王の最初の武勲』787~794 節)」、『仏語仏文学研究』(中央大学仏語仏文学研究会)、46 号、2014 年、pp.1-35.

## 中世ラテン文学、伊文学、西文学、その他 (書誌担当 : 小沼義雄)

〈原典の翻訳〉

ウォルター・マップ『宮廷人の閑話—中世ラテン綺譚集—』(瀬谷幸男訳)、論創社、2014 年

※風刺と諧謔と名作家 W・マップが語る、吸血鬼、メリュジーヌ、中世版リップ・ヴァン・ウィンクルと言われる古代ブリトン人のヘルラ王の異界巡行譚等々、ケルト的民間伝承の幽霊譚、幻視譚、驚異譚、妖精譚、奇跡譚、さらには当時の各修道糧、ことにもシトー修道会や女性嫌悪と反結婚主義の激烈な風刺譚などが満載である (本書の紹介文より)。

『中世ラテン語動物叙事詩イセングリムス—狼と狐の物語—』(丑田弘忍訳)、鳥影社、2014 年

マルコ・ポーロ／ルスティケッロ・ダ・ピーサ『世界の記—「東方見聞録」対校訳—』(高田英樹訳)、名古屋大学出版会、2013 年

※「東方見聞録」の名で知られるマルコ・ポーロの書『世界の記』は、時代の根本史料でありながら様々な版によって内容が大きく異なる。本書は、最も基本的なフランク-イタリア語版、セラダ手稿本、ラムージョ版という三つの版を全訳・対校し異同を示した世界で初めての試みであり、詳細な語注・解説とともに、あらゆる探究の確かな基盤となろう (本書の紹介文より)。

ダンテ『神曲 (地獄篇、煉獄篇、天国篇)』(原基晶訳)、講談社、全三冊、2014 年 (講談社学術文庫)

—『神曲 (地獄篇、煉獄篇、天国篇)』(三浦逸雄訳)、角川学芸出版、全三冊、2013 年 (角川ソフィア文庫)

『アマディス・デ・ガウラ①』(福井千春訳、渡邊浩司解説)、『中央評論』、65 巻 4 号 (No.286)、2014 年、pp.88-97.

エラスムス『痴愚神礼讃 —ラテン語原典訳—』(沓掛良彦訳)、中央公論新社、2014 年 (中公文庫)

ロレンツォ・ヴァッラ『「コンスタンティヌスの寄進状」を論ず』(高橋薫訳)、水声社、2014 年

〈研究書〉

池上俊一 『公共善の彼方に—後期中世シエナの社会—』、名古屋大学出版会、2014年  
井上雅夫 『カノッサへの道—歴史とロマン—』、関西学院大学出版会、2013年  
杵掛良彦 『エラスムス—人文主義の王者—』、岩波書店、2014年（岩波現代全書）  
藤崎衛 『中世教皇庁の成立と展開』、八坂書房、2013年  
村松真理子 『謎と暗号で読み解くダンテ「神曲」』、角川書店、2013年（角川 one テーマ 21）  
ダンテの謎研究会 『誰も書かなかったダンテ「神曲」の謎』、中経出版、2013年（中経の文庫）  
知的生活追跡班編 『読みはじめたらとまらないダンテ「神曲」』、青春出版社、2014年（青春文庫）

**編集・発行**

国際アーサー王学会日本支部事務局  
6078194 京都市山科区大宅栈敷 2-123  
嶋崎陽一

Tel. & Fax. : 075-591-7471

E-mail : shimazaki@me.com

メーリング・リスト :

members@ml.arthuriana.jp

（新規登録・アドレス変更は事務局まで）

学会ウェブサイト :

<http://www.arthuriana.jp/index.php>